

[連載]

技術教育研究会と私の歩み

4

佐々木 享

教育科学研究会（教科研）の常任委員となる

技術教育研究会の活動には関係ないように見えるかも知れないけれども、私自身には大いに関係があるので、私と教育科学研究会（教科研）のしごとに触れておく。

教科研は、教育科学全国協議会というそれまでの組織原則を大幅に改革して、1961年から、他の民間教育研究団体と同じく個人加盟の「教育科学研究会」という個人加盟の単一団体となった。この改革の過程でいくつかの部会が構成され、その一つに「技術と教育」部会が設けられ、私もその世話人の一人となった。原正敏先生と相談して、先生が技術教育研究会の世話に専念するので、私は教科研の方を受け持つことにしたのである。その後は、この部会からの推薦ということで教科研の常任委員となった。ここにはすぐれた教育研究者が多く、私は教育学の多くをここで学んだ。

いま都立大学の総長となっている山住正巳氏も当時は教科研の常任委員をしており、同氏が、教師も研究者なんだ、と折りあるごとに私を励ましてくれたことは忘れられない。戦前日本の生んだ最もすぐれた教育学者の一人である阿部重孝が山住正巳氏と同じことを書いているのを知ったのは、しばらくしてからだった。

技術教育研究会創立の時代背景

1958年の学習指導要領の全面改訂により「職業・家庭」が「技術・家庭」に再編されたことは、前述した。それは、技術革新といわれた時代の流れを象徴する動きであった。そしてそれは私の教育研究開眼の重要な契機になった。

当時の私たちには「職業・家庭」が「技術・家庭」に再編されたと見えたが、文部省は「技術・家庭」が新設されたものとして位置づけ、国立大学の教員養成課程に技術科教員養成課程を開設し始めた。ここに技術教育を専門的に研究し教育する可能性が生まれた。

1960年代は、経済の高度成長の始まった時代である。この時期には、戦後のいわゆるベビーブーム期の子どもたちが高校進学期を迎えた。全国各地で高校増設運動が進められ、日教組を中心として高校全員入学運動も進められていた。その中で、政府・文部省は高校については、普通科だけでなく、工業を中心とした職業学科の新設をも推進した。工業高校を増設するにはお金もかかるけれども、同時にその教員を確保することも重要な課題であった。その対策の一環として、1961年から工学部をもつ国立大学に、最終的には8箇所工業教員養成所を設置した。

財界の要求で5年一貫教育を行なう高等専門学校制度が新設されたことも、この時期の特徴を示唆していた。

1958年には旧来の技能者養成の面目を一新することを企図した職業訓練法が制定され、これが原正敏先生の教研集会への報告書のテーマであったことも前述した。また1961年には、経営者団体の強い要求で、高校の定時制・通信制の課程に在学する生徒が技能教育施設に在籍している時には、その技能教育施設における教育・訓練の一部を高校の単位として認定する、といういわゆる技能連携が制度化された。

1960年には、私は参加できなかったけれども、総評・中立労連が主催する(第1回)職業教育研究集会が開催された。労働組合運動が職業訓練に関心を示した重要な動きであった。61年、62年の集会には私も参加して、多くのことを学んだ。

財界の要求は工業教育に集中していたが、農業についても、農業基本法が制定され、中央産業教育審議会は1961年10月30日に「農業の近代化に即応する高等学校農業教育の改善方策について」建議しており、農業自営者養成をめざす宿舍をもつ大規模農業高校と農業関連産業従事者の育成をめざす学科への改編などが進められた。

これらすべては、新しい時代の流れすなわち1960年に始まる「国民所得倍增計画」という名の高度経済成長政策の一環であった。

日教組の中等教育研究委員会

こうした動きの中で、それまであまり活発でないといわれた高校教職員組合も反応し始めた。高校教師になったばかりの私も、日教組本部(具体的には幡野憲正氏)に呼び出されて、1960年10月に改訂された高校学習指導要領批判の冊子を作る委員会に参加した。この委員会は、冊子を作成し終わった後には、中等教育研究委員会として再編されて、その後、教職員組合のしごととしては珍しく、かなり長く活動した。教育学者の他、長谷川

淳、原正敏、林純一、大川圭一などの技術教育研究会のメンバーが加わっていた。高校教師になっていたとはいえ、制度などには無知に近かった私は、実は、上に「技術教育研究会創立の時代背景」として述べたことの大半を、この中等教育委員会の中で学んだ。

技術教育研究会の最初の著作

1962年12月に長谷川淳監修・技術教育研究会編著『中学技術科指導講座1 理論編・製図編・木材加工編』が雄山閣から刊行された(「理論編」ではなく「総説」だったような気もする。この巻は、いま私の手元にはない)。技教研の会としての最初の著作である。

戦前から日本史関係のユニークな出版社として知られる雄山閣からやや畑違いの私たちの編著書を刊行することになった経緯、私たちにこの仕事を持ち込んで下さった人、何時からこの仕事を始めたのか等の事情は、記録がないし、記憶も定かでないので、いまでは皆目不明である。私のぼんやりした記憶では、雄山閣に体育教育関係の編集者がおられ、体育関係の講座を数冊刊行していたところだったので、その流れの延長上にこの企画が生まれたのだった。研究会の編著だから運営委員会に諮って決めたことだと思うが、私が編集責任者となってことを進めた。全3冊の予定で、第2冊の『中学技術科指導講座2金属加工編・機械編・内燃機関編』は1964年1月に刊行された。第1冊と第2冊との刊行時期が離れていたことから推測されるように、この著作はひどく難渋した。そのあげく、ついに第3冊は刊行されずに終わった。寄付された印税の一部が技教研の会計を潤すことはできたが、編集者としては無能ぶりを遺憾なく発揮した一幕だった。当時の技教研の力量では時期尚早だったのかも知れない。

(続く)